

モザンビークと ラテンアメリカ諸国との関係

池田 敏雄

私は駐モザンビーク日本国大使として2017年4月より2020年2月まで同国に駐在した。モザンビークとラテンアメリカ(中南米)諸国との関係で一番目立つのはブラジルとの関係であるところ、モザンビークに大使館を開設している4か国(キューバ、ベネズエラ、ブラジル、アルゼンチン)との関係について記述したい。

モザンビークは東アフリカに位置するポルトガルの旧植民地であり、1975年6月にポルトガルからの独立を果たした。ポルトガルからの独立を果たす上で主導的役割を果たしたのは、1962年6月にタンザニアで亡命モザンビーク人により結成されたFrente de Libertação de Moçambique(モザンビーク解放戦線:Frelimo)、通称フレリモである。

1964年9月25日、フレリモ中央委員会はポルトガルに対する独立・解放のための軍事行動を決定し、同日ポルトガル植民地軍に対する組織的戦闘を開始した。ソヴィエト連邦は独立解放闘争における反政府ゲリラ活動や政治戦略について指導を行い、ロケット砲など多くの軍事兵器を供与した。

モザンビークとキューバの外交関係はモザンビークが独立を果たした1975年6月に樹立された。キューバはソ連、中国とともにモザンビークの独立と解放のために

貢献し、同国との関係は独立闘争時代に遡る。このためキューバはモザンビークの兄弟国とされ、中南米諸国の中でも特別の地位を占めている。またキューバは現在でもモザンビークに275名の医師を派遣し、保健分野で貢献している。2017年6月キューバを訪問したニュシ・モザンビーク大統領はラウル・カストロ国家評議会議長と会談し、キューバとの友好と協力関係を再活性化する意向を表明した。また同大統領は、モザンビークとキューバはかつて自由のために共に戦い、今日ではそれぞれの国民の発展と繁栄を目指し共に戦っていると述べた。

これを受けて2020年3月ディアスカネル・キューバ大統領はモザンビークを訪問する予定である。キューバ国家元首のモザンビーク訪問は、1977年のフィデル・カストロのモザンビーク訪問以来初めてである。ディアスカネル大統領のモザンビーク訪問の際に、首都マプトにおいて経済フォーラムが開催され、両国の経済・協力関係の強化が議論される予定である。観光、保健分野の協

力関係の強化と葉巻の生産国であるキューバへのモザンビーク産の葉タバコの輸出を行うことが期待される。(筆者注:新型コロナウイルス対策のためディアスカネル大統領のモザンビーク訪問は延期された。)

モザンビークとベネズエラとの外交関係は2005年11月に樹立された。2009年4月、両国は協力に関する一般協定及び政治協議のメカニズムに関するメモランダムを締結した。ベネズエラのモザンビークに対する協力は教育分野に限定され、ベネズエラは「アフリカの一学校を後援する」プログラムをモザンビークの首都マプト市内の小学校を対象に実施中である。また、チャベス大統領のイニシアティブの下、アヤクチョ大元帥基金を通じて奨学金を受けた25人のモザンビーク人学生がベネズエラの大学で医学とスポーツを履修している。2019年1月のマドゥーロの2期目の大統領就任以降のベネズエラの政治的混乱について、多くのアフリカ諸国は沈黙を守っている。マヌエル・アウ



ニュシ大統領とカストロ・キューバ国家評議会議長(出所:モザンビーク外務省 HP)

グスト アンゴラ外相は、本問題に対して公に発言した数少ないアフリカ諸国の要人の一人である。同外相は、「合法的かつ選挙で選出されたマドゥーロ政権との外交関係を我々は有している。ベネズエラの危機に対してアンゴラは対話を擁護する。対話以外の解決策はない。」と発言した。この立場は本問題に対して対話を擁護するアフリカ連合の立場に類似している。また SADC（南部アフリカ開発共同体）はグアイド支持を拒絶し、SADC 随一の政治経済大国である南アフリカはマドゥーロ支持を明確にした。しかし、多くのアフリカ諸国は西側諸国の怒りを買うことを恐れてマドゥーロ支持を公にしない。アフリカ諸国がマドゥーロを支持するのは、故チャベス大統領がアフリカ諸国を支援したからであり、マリ、ニジェール、ベニンなどの国に石油を無償提供したからである。またアフリカ諸国の中に、反帝国主義、反米主義の感情が残っているからでもある。モザンビーク政府要人は件の問題について発言していないが、SADC のメンバー国であるモザンビークの立場は SADC の立場と同一であり、さらにモザンビークとしては、歴史的に関係の深いキューバがマドゥーロ政権の後盾になっていることも同政権を支持する所以であろうことは想像に難くない。このため 2019 年



ゲブーザ大統領とルーラ ブラジル大統領

2 月、ブラジリアに駐在する新モザンビーク大使はマドゥーロに対して信任状を提出している。

このように記述してくると、モザンビークは社会主義国であるように思われるかも知れない。確かにモザンビークは独立達成後フレリモによる一党独裁の社会主義国としてスタートしたが、その後の内戦による経済社会的混乱の中、1980 年代に民主化への希求と西側傾斜が顕著になり、1989 年の第 5 回党大会でフレリモはマルクス・レーニン主義を正式に放棄し、市場主義経済へと方向転換した。1990 年には憲法が修正され、国名が「モザンビーク人民共和国」から「モザンビーク共和国」へと変更された。また複数政党制も導入された。現在では土地が国有であることを除けば、モザンビークは通常の市場経済型民主国家と考えて差し支えない。

モザンビークとブラジルとの外交関係は、1975 年 11 月に樹立され、駐モザンビーク ブラジル大使館は 1976 年 3 月に開設された。アフリカのポルトガル植民地に対するブラジルの立場は、ポルトガルと歩調を合わせることであった。1953 年にブラジルとポルトガルの間で締結された「友好と協定の条約」により、ブラジルがポルトガル植民地における自由のための闘争を支持することを困難にした。また、ポルトガルとの上記合意に加えて、米国の強い影響力もありポルトガルの植民地問題に関してブラジルがポルトガルや米国に歩調を合わせることに疑いが呈されることはなかった。ブラジルのポルトガル植民地

に対する政策が変化したのは、軍政下の 1974 年にガイゼルがブラジル大統領に就任してからである。ポルトガルの頸木を脱しブラジルの利益を優先するとの方針を踏まえ、ガイゼル大統領はポルトガルのカーネーション革命を契機にキューバとソ連の同盟国であったアンゴラを支持し、南アフリカのアパルトヘイトを最終的に非難するに至った。ブラジルはポルトガルとポルトガルの旧植民地国との調停者の役割を果たそうとしたが、マリオ・ソアレス ポルトガル外相が直接ポルトガルの旧植民地国の指導者と協議を行うとともに、ポルトガルの旧植民地国の指導者がブラジルに対する信頼を有していなかったことから、その企ては挫折した。マシエル・モザンビーク初代大統領は、1975 年 6 月 25 日の独立宣言の式典にブラジル政府の公式代表団の参加を認めなかった。2000 年にカルドゾ大統領がブラジル大統領として初めてモザンビークを訪問し、翌年シサノ大統領がモザンビーク大統領として初めてブラジルを訪問して、両国は保健、教育、社会政策、治安分野における協力の拡大について合意した。しかし、ブラジルが本格的にアフリカ諸国との関係強化に乗り出したのはルーラが大統領に就任してからである。ルーラ大統領は任期中（2003～10 年）にモザンビークを 3 回（2003、08 年、10 年）訪問した。

ルーラ大統領時代に進展した二国間プロジェクトのうち、代表的なプロジェクトを 2 件紹介したい。ブラジルの資源会社であるヴァレ社は、2004 年にモザンビークのテテ州に存するモアチーズ炭鉱開発の権利を国際入札で獲得、

2007年にはMining Concessionを取得して2011年に生産を開始した。当初、セナ線を通じてソファラ州ベイラ港より石炭を輸出していたが輸送能力が限られており、ナンブラ州ナカラ港を整備するとともに、モアチーズ炭鉱からナカラ港までの912kmの鉄道を整備し輸送能力を拡大することとした。これがナカラ回廊であり、2017年5月に同回廊の開業式典が開催された。もう一つは、モザンビークにおける抗エイズ薬製造工場の建設プロジェクトである。2003年にモザンビークを訪問したルーラ大統領が同構想を提唱し、2008年の同国訪問時に同プロジェクトの実施を約束、2012年7月にテメ



ナカラ回廊 ナカラ港とモアチーズ炭鉱を結ぶ鉄道

ル副大統領が出席して抗エイズ薬製造工場の開所式が開催された。

モザンビークとアルゼンチンとの外交関係は、1981年に樹立され、駐モザンビークアルゼンチン大使館は2013年7月に開設された。2019年3月にブエノスアイレスで開催された第2回国連南南協力会議に参加するため、パシエコモザンビーク外務協力大臣はアルゼンチンを訪問し、同国政府との間で技術協力協定、経済商業投資関係の発展に係る二国間

協力協定、農業分野に係る合意メモランダム、モザンビークの科学、技術及びイノベーションに係る国家システムの強化プロジェクト実施のためのモザンビーク、ポルトガル、アルゼンチンの三角協力に係るプロトコールに署名した。

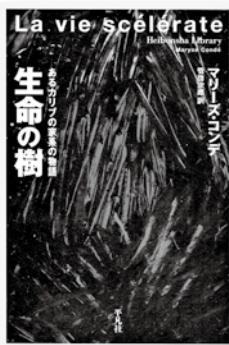
(本稿は筆者個人の見方であって、外務省・在モザンビーク大使館の見解を述べたものではない。)

(いけだ としお 前駐モザンビーク日本国大使)



モザンビーク、アルゼンチン、ポルトガル三角協力

ラテンアメリカ参考図書案内



『生命の樹ーあるカリブの家系の物語』

マリーズ・コンデ 管啓次郎訳 平凡社(ライブラリー 891)
2019年12月 1,900円+税 ISBN978-4-582-76891-6

カリブ海西インド諸島にあるフランス海外県グアドループの黒人中流階級に生まれ、フランスで高等教育を受け、西アフリカでフランス語教師として働き、後にパリ大学で比較文学の博士号を取り、大学教員の傍ら小説を書いてきた著者が描くグアドループのルイ家四代の物語。

島を出た曾祖父アルベールが、パナマの運河工事を皮切りに北米のサンフランシスコで稼いで島の黒人中産階級にのし上がり、子どもたちはフランス「本土」に留学して専門職に就く者も出た。孫娘テクラについての、頭は良かったものの夢想と欲望のまま世界中を彷徨う物語りを軸として、一族それぞれが生き方を変えていく姿を描いているが、そこにはカリブのある家系史を通じて、出自のアフリカ、出身地のカリブ、働きに行った北・中米と文化的背景のフランス等の欧州に、同時にそしてそのすべてに所属しているという意識を常に持つカリブの人々の小さな場所から生まれた大きな文化衝突の姿を巧みに語る本書が、近年世界的に注目されるようになってきたカリブ海文学の代表作の一つと評される所以である。

(桜井 敏浩)